『西南アジア研究』No. 23, 1984

Baluch nomadism 再考
——アフガニスタン Pashtun 遊牧民との対比から——

松　井　　健

I

パキスタンの西部からイラン東南部にかけて広がる Baluchistan には，おもに Baluch 族と Brahui 族とが居住している。しかし，その人口密度は非常に低く，Baluchistan 州がパキスタン全面積の40％を占めるのに，Baluch 族はその全人口の 4 ％，Brahui 族は 1 ％を占めるにすぎない。

Baluch の人口中，ある部分はオアシスに定着して農耕生活を営むが，そのほかの部分については，移牧的農耕民あるいは遊牧民と定義づけられる生活を営んでいる。後二者にあっては，その生活様式は多少とも遊動的（nomadic）であるということができる。何らかのかたちで灌漑された耕作地をもつ定着的農耕民は *shehri*（イラン側では *shahri*）と呼ばれるが，dry farming をおこなう移牧的農耕民あるいは遊牧民で，遊動的な生活を営む人たちは *baluch* と呼ばれている。パキスタンの Makran 地方では，ふつう遊牧民という言葉に含意される，とくに nomadic な人々のことを，*pahwal* と呼んでいる。

本稿は，Baluch 族のなかでも，もっとも本来的な意味で Baluch 的であると考えられる *baluch*[1] の遊動生活（nomadism）について再検討し，それを広くアフガニスタンと Baluchistan に分布するイラン文化圏に所属する遊牧民の版図のなかに位置づけることを目指すものである。*shehri* と *pahwal*（イラン側では *shahri* と *baluch*）という二分法そのものが，Baluch 族のなかで，牧畜か農耕かという生業内容よりも，それが多少とも遊動的な生活形態，すなわち nomadism によって特徴づけられているかどうかが重視

1) 広義には，支配層でもなく，自由を拘束されている被支配層でもない，平民をさす。パキスタン側の Makran 地方では，*pahwal* のことを，もっともBaluch 族らしいとみなしている。イラン側では，*baluch* という言葉は，狭義には，*pahwal* と近い意味内容をもっている。

されていることを示していることも，この作業の重要性の証左のひとつとなろう。

ただ，Baluch 族の *baluch* についての研究は，*shehri*（*shahri*）についても同様ではあるが，それほど十全な野外調査で基礎づけられているわけではない。広大な Baluchistan のなかで，イラン側とパキスタン側，また Makran 地方と内陸部について，その社会構成にかなりの差違があることが報告されており[2]，今後より詳細な地域変異がその nomadism についても明らかにされていくことと思われる。筆者自身の Baluch 族調査[3]も十分とはいいがたく，本稿は今後 Baluch 族調査を進めていくためのひとつの見通しをえようとしておこなわれた，予備的な作業からえられた暫定的な結果であることを予めことわっておかなければならない。

2) パキスタン側の Baluchistan の西端に近い，Makran 地方の Panjgur における社会成層については，Pastner らの報告がある［PASTNER 1971：174；PASTNER & PASTNER 1972：129］。Salzman の報告しているイラン側の Baluchistan についても，南部では同様の成層構造がみられる［SALZMAN 1971b：438－439］。

これらの Makran 地方では，灌漑施設をもつ農業生産の中心地を領有する世襲の支配者 *hakim*（イラン側では *hakom*）の属する内婚的な支配層 *hakimzat*（*hakomzat*）と，平民の Baluch 族，そしておもに黒人奴隷 *ghulam* からなる，自由を拘束されて支配層につかえる *hizmatkar* 層の三層に分化している。Salzman は，こうした Makran 地方の社会構成を feudal-like と呼んでいる［SALZMAN 1971b：434］。

しかし，パキスタン側の Baluchistan の東部 Sulaiman 山地，イラン側のより北部の Sarhad 地方では，このような重層的な社会構造はみられず［PASTNER & PASTNER 1972：132；SALZMAN 1971b：441］，tribal と称してよいようである。パキスタン側では，同じ遊牧的な Baluch 族でも，自己を社会的に同定する仕方が，西の Makran 地方と，東の Sulaiman 山地の Marri や Bugti 諸族では相違し，前者が牧地の地縁性を基礎とするのに対して，後者は系譜上の位置を最重視するという［PASTNER & PASTNER 1972：132］。

3) Baluch 族については，1981年11月から1982年3月まで，トヨタ財団研究助成をえて現地調査を実施することができた。それ以後も短期間の補足調査を続け，1982年9－10月には，ロンドンの India Office Library とロンドン大学 S. O. A. S. において，関連する文献調査と資料集収をおこなうことができた。

Pashtun 族については，文部省科学研究費補助金による海外学術調査隊の隊員として，1978年6－12月にアフガニスタンでおこなうことのできた野外調査によってえられた資料を基礎にしている。

このような状況にあっても，一般的な理論的意味をもつ，Baluch 族の nomadism についての研究が皆無であったというわけではない。なかでも，Salzman による一連の研究［SALZMAN 1967，1971 a，b，1973，1974，1975］は，Baluch 族の遊牧民の生業形態を，遊牧という生活様式一般の理論的な検討のなかに位置づけたものとして高く評価することができる。

Salzman は，イランの Sarhad 地方の Baluch 族について野外調査をおこない，*baluch* のなかでも，牧畜にかなりの比重を置く Yarahmadzai tribe の生業活動を記述した。多くの *baluch* に共通しているヤギの群の放牧をおこなって，ナツメヤシや小麦の粗放な栽培に従うのが，彼らの生業活動の基調である。過去においては，狩猟や，現在では禁止されている略奪（raiding）をおこない，現在では，賃労働や運送業（ときには密輸になることもありうる）などを，その nomadism の途次におこなって，彼らはその生業活動を完結させてきたということが示された。

これをもとに，Salzman は，遊牧研究一般に意味をもつ，ふたつの理論的所見を展開した。そのひとつは，遊牧（pastoral nomadism）という概念に集約されている，牧畜 pastoralism と遊動 nomadism のむすびつきは，けっして必然的なものではないという指摘である。これは，生業の内容と，移動という視点からみた生活形態とのむすびつき方は，本来多様であって，従来あたかもひとつの確固として典型的なひとつの生活様式とみなされてきた遊牧も，実は可能な組み合わせのひとつにすぎないということを明確に示したものであった。

この指摘は，つぎのふたつめの理論的見解と深く関連している。それは，移動をどのようにおこなうかという生活形態は，限られた生活空間のなかからいかに大きな生活資源を引き出すかという，当該社会の適応の結果であるとみなすことができるという見方である。そして，ここに重点を置くと，これまで典型的なものとみなされてきた遊牧という生活様式は，むしろ例外的なものであるとさえみなしうるということが示唆された。

遊動生活をおくりつつ，その生業基盤を純粋に牧畜にだけもつ生活様式は，むしろ "the rare exception" である［SALZMAN 1971 a：190］というのが，これら二つの Salzman の理論的見解の帰結であった。例証として，北アフリカのサハラやモーリタニアなどの遊牧民，東アフリカの牧牛民 Nuer 族や Karimojong 族，イラン南部の Basseri 族が，純粋な牧畜民というよりも，むしろいくつもの非牧畜的生活資源を，移動によってむすびつける，multi-resource adaptation をおこなっていることが示された［SALZMAN 1971 a：189—190］。

これら一連の Salzman の報告は，イラン側の Baluchistan からの一事例報告というだけではなく，ヤギ放牧をおこないつつ，multi-resource adaptation としての遊動生活をおこなうという *baluch* の nomadism の一般像を提示することになったということができる。それが，Salzman の意図とは別に，Baluch 族の nomadism の全体像とその意味づけに，一定の方向性を与えることになってしまったということも見逃すことができない。

こうした Salzman による，Baluch 族の nomadism の解釈および意味づけについての再吟味をおこない，別の解釈と位置づけの可能性を考えるのが本稿の目標である。もし，別の解釈と位置づけに十分な可能性があり，それがより広い視野からイラン圏の遊牧民の生活を理解するのに資するところがあることを示唆することができ，そのための課題の若干について見通しをつけることができれば，その目標は十分に達せられたというべきであろう。

II

牧畜であれば，牧畜だけをというように，ひとつだけの生活資源で適応をおこなう uni-resource adaptation と，いくつもの生活資源をむすびあわせて適応をおこなう multi-resource adaptation という，Salzman の類型化を，イラン文化圏の遊牧民に適用することから始めよう。というのは，Baluch 族の multi-resource nomadism の近似例を，アフリカやイラン南部の Basseri 族に求めながら，Salzman は，Baluch 族のもっとも近い隣人である Pashtun 族については何の言及もしていないからである。当時 Pashtun 遊牧民についての調査報告が利用できなかったことも，その理由のひとつかもしれない。

アフガニスタンにおける Pashtun 族の遊牧民についての民族誌をみると［GLATZER 1977；松井　1980］，その遊牧生活はむしろ Baluch 族と反対の uni-resource adaptation を目指すものであるという印象を受ける。Pashtun 族の遊牧生活を扱う，それほど多くない文献のうちのいくつかもこれを支持する［BALIKCI 1978；BALLAND 1979，1982；TAPPER 1977］。アフガニスタンの Pashtun 遊牧民，それも Durrani 系の人たちは，はっきりと pastoral nomads で，生業内容は牧畜を中心としており，Salzman の適応様式の類型では，uni-resource adaptation をおこなっているとみなすことができるのである。

Pashtun 遊牧民の主要な牧畜生産物は，ヒツジの肉である場合［BALIKCI 1978；

GLATZER 1977]，羊毛である場合，カラクル毛皮[4]である場合などが認められるにしても，いずれもがほぼ周年牧畜にのみ関与している遊牧民によって生産され，都市のバザールへ搬入されて換金されるのである。

地域ごとに Pashtun 族の遊牧集団が飼養するヒツジのタイプには差があり，それは主要な牧畜生産物の生産性をもっとも高めるように選択されているということを指摘することができる。これは，従って，換金経済と接触をもつことによって，もっとも純粋な uni-resource adaptation としての pastoral nomadism を維持している例として位置づけられるだろう。

しかし，反面，これらの Pashtun 遊牧民の事例を，Baluch nomads とまったく同列に論じることができないことも確かである。

明らかに，Pashtun 遊牧民については，その遊動集団の外に広がる国民経済（ときには国際経済）につながるような巨大な加工と消費の組織体が，その遊牧的生産と密接に関係しているからである。生産物は羊肉であれ，羊毛であれ，カラクル毛皮であれ，市場においてその価格が決定され，遊牧民が手にすることのできる貨幣の量を直接的に左右することになる。

このような状況のため，多くの Pashtun 遊牧民にあっては，当該の遊牧集団と系譜的に近い人たちが，生産集団である遊牧民と，都市における加工，消費市場との間を仲介する役を担うことが多々ある。これは，本来 Pashtun 族が商取り引きを好み，古くから中央アジア，インド，Baluchistan[5]，イランへと進出したという事情にも大きくたすけられているということができる。これらの仲介者，もしくは仲買人は，遊牧民と都市バザールとの間にだけ介在するものではなく，都市バザール内においてもいろいろなかたちで機能を果たしているのをみることができる。

これらの仲買人の存在にたすけられて，Pashtun 遊牧民の多くは，uni-resource adaptation と判断することができる nomadic pastoralism に専従することができたので

4) カラクル・タイプのヒツジの生後すぐのオスの仔の毛皮。アフガニスタンでは，ふちなしの帽子に加工され，男性が着用するが，この習慣は本来は Tajik 族のものであった。コートの襟などにも用いられるので，海外へも輸出される。Hazarajat からソヴィエト連邦領中央アジアの特産品である［BALLAND 1977，1979］。

5) Pottinger は，19世紀初頭の Baluchistan で活躍していたアフガン（Pashtun 族）の商人を活写している［POTTINGER 1816：44－47，79］。

ある。彼らの nomadism は利用可能な牧地の高度が季節的に規則正しく変化することに適合して，ヒツジを中心とする家畜群を移動させるというものである。そして，牧畜生産物全体というよりも，換金を目的として，商品価値をもつその一部分の生産性をあげることを目標として組織されている。

冬営地と夏営地との間の移動，タネつけ用の雄ヒツジの選択，家畜群を構成するヒツジのタイプの選定，都市近郊を通過する日程等，すべてこの特定の牧畜生産物の効率的な生産と換金のために決定されているといって過言ではない。

カラクル毛皮を主生産物としている Pashtun 遊牧民にあっては，高価格で売ることができるカラクル毛皮をえるために，ヒツジ群の大多数を占める雌ヒツジの毛質と毛色を選んでそろえる。これに，特定の毛質と毛色のタネ雄でタネつけをおこなうのである。

その戦略は，一群の所与としての雌ヒツジ群から，販売価格が最高になるカラクル毛皮を生産することにかかっている。生まれてすぐの雄仔ヒツジを殺してカラクル毛皮をとるため，その数は春に生まれる仔ヒツジの約半数に相当する。もう半数は雌仔ヒツジで，やがて再生産に加わる雌ヒツジへと飼育されることになる。

ひとつのヒツジ群からとれるカラクル毛皮の販売価格を最高にするためには，高価な色や毛質の毛皮を多く生産すればよいのは勿論であるが，交配の毛色の組みあわせによっては，体が弱かったり不妊の雌の仔が生まれる可能性があるので，タネつけは慎重におこなわれるのが大抵である。毛色，毛質ともに平均的なカラクル毛皮をえて，つぎの世代に丈夫な雌仔ヒツジを残すことができれば，将来的には有望な生産をおこなったことになるという，長期的な配慮も払われている。

以上に略述してきた Pashtun 遊牧民のヒツジ群の運営管理は，その主要畜産品が肉であっても羊毛であっても，原則としてかわらない。これらの Pashtun 遊牧民の nomadism は， pastoralism に焦点をあわせているので，Salzman の類型の uni-resource adaptation にあたることになるが，その adaptation は，自然環境への adaptation であると同様に，あるいはそれ以上に利潤を極大化するという明確な目標をもった，経済環境への対応であるということができるのである。Pashtun 遊牧民の adaptation は，Baluch nomads の adaptation と同じ質のものではありえないのである。

Baluch nomads にあっては，その multi-resource adaptation のなかに賃労働や運搬業（ラクダの貸与を含む）があっても，それらはまず遊動集団 *halk* の自足を目的としている。困難な状況においては，最小の遊動集団である数張りのテントからなる *halk* の成員が，それぞれ得意とする方法で働いて，*halk* 全体の生活費を拾出しようとする

[PASTNER 1975]。貧しい，すなわち所有家畜（主にヤギ）数の少ない *halk* は，このような状況では事実上離散してしまうことにさえなるのである。

そして，Salzman が正当に指摘しているように，こうした分野への進出が略奪の禁止によって余儀なくされたものであるとみなすことができるなら，少なくとも19世紀の略奪の応酬の時代には，遊動集団がその遊動範囲のなかで自足することは最重点目標とはされていなかったと考えられる。それでも，当時でも，主要な生業手段はヤギ放牧，粗放な dry farming, *chupao* と呼ばれた略奪行 と数え上げられるから，multi-resource adaptation からはずれることはなかったことになる。

従って，生業活動を牧畜だけに限って，なかでも特定の畜産品の生産効率を高めてそれを換金するという Pashtun 遊牧民の nomadism は，Baluch 族の nomadism と確かに対照的な性格をもっているといえる。しかし，この nomadism の対照的な性格を，resource exploitation としての生業活動の対照的な性格に由来するものとみる Salzman の見方は，歴史的な視点を欠き多少皮相であるということができよう。

Pashtun 族のヒツジ遊牧と，Baluch 族のヤギ放牧は，resource の性格からも，exploitation の様式としても，相互に異なるものであることは明らかであろう。Salzman の類型で，Pashtun 遊牧民を uni-resource adaptation，Baluch nomads を multi-resource adaptation と分けても，前者が "the rare exception" とはならないことは例示した通りである。これは，当の Baluch 族自身がおかれている，イラン文化圏東涯地域の文化社会的性格によるものと思われる。

そればかりではなく，Salzman は nomadism の基本的な論理は，pastoralism との一対一結合よりも，multi-resource adaptation のかたちになっていく可能性の強いことを示唆した。けれども，そのためには前提条件として，適応をおこなっている特定の民族集団の経済活動が，ある程度閉鎖系のなかでおこなわれているものとみなすことを必要としている。

ところが，この前提的な条件の妥当性こそが，Baluch 族のおかれている地域的歴史的な文脈から再考される必要があるのである。ここでは，ふたつの民族集団の対照的な nomadism の様相を，むしろ Pashtun の場合が商業的，Baluch の場合が非商業的（ないしは自給的）と性格づける方が，Baluch nomadism を適切かつ多面的に読み解くことを容易にするように思われるからである。

Baluch nomadism を，Salzman のいうように，空間的時間的に限定されたかたちでしか生活資源の利用を許さない自然環境へ，孤立的な小集団が自足的に生計を維持しよ

うと adaptation をおこなっているとみなすよりも，より広い社会経済的諸条件への対応とみなす方が，そのあり方を正確にみることができる可能性が強い。アフガニスタンと Baluchistan では，Pashtun と Baluch の間のヒツジとヤギという飼養家畜の差からうかがえるような自然条件の差違があるのは確かであるが，これが nomadism の形式の決定因となっているとは考えられないのである。

その対応の結果が，Baluch 族においては，北隣のアフガニスタンの Pashtun 遊牧民と著しく対蹠的な，非商業的で多様な資源利用を組み合わせる multi-resource nomadism として現出していることを認め，まずそこに関与している諸要因について考察することから始めるべきであろう。このように考えることによって Baluch 族の nomadism を，Pashtun 遊牧民のそれとの対比のうえで，より広いイラン文化圏の東涯地域における遊牧もしくは遊動的生活の可能な変異の幅のなかにより正しく位置づけることができるだろうと考えられるのである。

Ⅲ

Baluch nomads の nomadism が非商業的であり，Pashtun 遊牧民の nomadism が牧畜専業で，商業的な畜産品の生産換金を基本的な内容としていることが，まず出発点になる。しかし，これらふたつの牧畜生活の様式に，何が関与しているのかをできるだけ明らかにしなければならない。

最初に考えられるのは，両民族集団の分布域内に畜産品の換金を保証するバザール都市が存立しているかどうかという条件である。畜産品の換金と，えられた現金によって生活必需品を購入する商業的な遊牧民にとっては，こうしたバザール都市がその季節的な移動路の近傍にあることは，生活上必須の条件である。前記の Pashtun 遊牧民については，アフガニスタンの Kunduz，Mazar-i-Sharif，Herat, Kandahar がまさにそのようなバザール都市にあたるといえる。

これらのバザールは，その歴史が比較的古い場合については勿論，Kunduz のようにバザール都市としての機能を果たすようになった時期が比較的新しい場合においても，その地域における Pashtun 遊牧民の牧畜生産活動の隆盛と軌を一にして発達してきている。こうした諸都市には，現在では，牧畜生産品の購入，加工，商品化，販売をおこなう一連の職人や商人が，ある場合にはギルド様に組織化されて，職能集団として集住

している。

さきにも比較検討の素材とした北部アフガニスタンの Kunduz 周辺に冬営地をもつ Pashtun 遊牧民は，カラクル毛皮をとるために春に生まれてくる仔ヒツジのうち，雄をすぐに殺して皮をはぐ。岩塩をまぶして小さく折りたたみ，その外を布で包むようにして，塩漬け状態にして保管するのである。これが一定量に達すると，冬営地にやって来る仲買商人 *jelāb* に売るか，自ら Kunduz に出かけてカラクル帽子（*kulā*）つくり職人（*kulādoz*）に売る。

仲買商人は Kunduz や Mazar-i-Sharif にとどまらず，Kabul といった遠隔地にまで出向いて帽子つくり職人にカラクル毛皮を売りさばく。

職人のつくったカラクル帽子は，カラクル帽子商人 *kulāfrūsh* によって売られる。こうした専門商人と，行商や露店売りをする小間物商 *banjāra* との間を，仲介人 *jelāb* がとりもって，三者三様の利益をえつつ，カラクル帽子販売の効率化をはかることもおこなわれる。

牧畜生産物として，ヒツジの部位で商品価値をもつのは，羊毛，毛皮（カラクル毛皮のように），皮革，肉や脂肪や食品として評価される内臓（肝臓など），そして頭や脚の先や食品として評価されない内臓の五品目である。そして，これら五つのヒツジの部位それぞれについて，加工と販売をおこなう20以上の職種が系列化されている。これらの職種は相互に順序をもって関連しているが，独自の職能集団として，ときにははっきりとしたギルドとして，またときには被差別集団として，固有の領分をもっている。

Pashtun 遊牧民が，Salzman のいう uni-resource adaptation をおこなって，商業的な専業牧畜をおこなうためには，上記のような制度をもったバザール都市が必須であることを理解することができる。Pashtun 遊牧民の本来の版図であった，Hindu Kush 山地の南側では，西から Herat，Kandahar，Ghazni，Kabul，Jalalabad が古くからバザール都市としての機能を十分に果たしてきた。とくに，Durrani 系 Pashtun 族の王国としてアフガニスタンの母体が形成されて以後は，それらの諸都市の統治，運営に Pashtun 族自らが大きな裁量をもつことになった。

Abdur Rahman（Abd al-Rahman）王のおこなった，アフガニスタン王国の北方国境防衛のための，Pashtun 族の Hindu Kush 山地北側への移住奨励（ないし強制）は，1890年代に紆余曲折ののちようやく軌道に乗る［TAPPER 1973］。これ以後，Hazarajat の北でも，商業をはじめとする主要なバザール都市の職種は，速やかに Pashtun 族によって占有されるようになり，また南からの Pashtun 族の商人や職人の移住によって

著しく拡大充実されることになる。これは，Pashtun 遊牧民が，中央政府の特許のもとに牧地の使用権を手に入れて，新しい地域で遊牧生活を再建していくのと同時進行のかたちでおこなわれた。カラクル毛皮の生産も，以前においては，Uzbek や Turkmen の遊牧民がおこなっていたものであった。

興味深いのは，つねに流通にかかわる商人が，生産者である遊牧民と同じ民族集団に属していることである。近い父系出自関係をもつふたつの集団が，一方が遊牧民として生産にあたり，もう一方がその流通を担当するという例はよくみられる。同じ minor lineage のなかで，このような分業がみられることさえある［BALIKCI 1978：3］。

Hindu Kush 山地の北への Pashtun 遊牧民の進出が，中央政府からの特権付与によって支援され，従来ほかの民族集団によって専用されていた牧地を特恵的に使用することを許されたことはよく知られている。Badakhshan や Hazarajat の高地の夏営地においては，今も Pashtun 遊牧民と，ほかの民族集団の以前からの牧地使用者との間には，放牧権をめぐる根強い反目が存続している。

Pashtun 遊牧民の専業的牧畜活動は，従って，より広い政治的な過程と経済的な背景によって支えられていると判断することができる。そこでは，バザール都市とその商業活動が，牧畜生産物の商品価値と換金を保証するという条件が満たされている。遊牧民とその生産物を扱う商人が同じ民族集団に属し，同じ言語を話し，とくに Pashtu 語の場合には，ほかの民族集団に属する人がその言語を用いることはまず不可能である［BARTH 1964］。また，広く深くたどられる父系出自関係によって，両者は相互の系譜上の位置を確認しあうことができる。こうした牧畜生産部門と流通部門が，Pashtun の同じ tribe ときには同じ lineage によって占められ，これに多くの特権を許す中央政府の政治的保護が与えられているのである。このような政治経済的な過程によって，Pashtun 遊牧民は uni-resource adaptation としての pure pastoralism を，遠く隔った牧地を往還しつつおこなうことが可能になったということができる。

Pashtun 遊牧民をめぐるこれらの事情と対比しつつ，Baluchistan における Baluch 族の nomadism の独自な性格と意味を読み解くことができる。

まず，Baluchistan におけるバザール都市の未発達という条件がある。この点だけでも，アフガニスタンの場合と，その遊牧環境は大きく異なるのである。現在の Baluchistan 州の州都 Quetta は，19世紀になって英国のインド北西辺境部防衛の拠点として発展してきた都市であり，その起源は Pashtun 族の小村落にさかのぼる。Quetta の発展は，英国の植民地支配における “Forward Policy” の帰結であったといえるので

ある[6]。

現在においても，Quetta の居住人口中 Baluch の占める割合は，けっして圧倒的なものではない。正確な人口統計はないけれども，Quetta のなかには，政府官庁や軍の施設が大きな面積を占め，多くの Punjab 人や Sind 人が勤務し，Brahui や Pashtun や Hindi の集住地区がかなりあることからも，それを追認することができる。

19世紀初頭においては，Baluchistan で都市と呼べるほどの人口集住地は，Kalat だけであったといってよいだろう。そして，この Kalat も，Baluch の町であるよりも Brahui の町であり，バザール都市であるというよりは，政治的軍事的な色彩の濃い，その名前の通りの城砦都市であったのである。

山地にある Kalat は，けっして交通の便に恵まれたところに立地しているわけではなかった。しかし，その地勢に助けられて，Kalat は強固な砦として，Makran 地方の小さなオアシスの *hakim*（*hakom*）階級の砦とはまったく質の異なる機能を果たしえたことは確かである。けれども，当然ながら，Baluch nomads の生活に直接関与するようなバザールとはほとんどなりえなかった。そこでの商業活動は，アフガン商人とインド商人に握られていたとみてよい。

この事態は，全 Baluchistan 的に，19世紀初頭 [POTTINGER 1816] から 時代が新しくなるまで変化があまりみられない。Quetta においても，イランへの鉄道沿いに新しく発達した町々においても，商人は大抵 Pashtun か Hindi である。町によってはヒンドゥー教のパゴダがあり，Hindi の信仰を集めているという事態は，アフガニスタンではとても考えられないところである。

現在の Quetta の家畜市場でも，そこで家畜を売っている仲買人は，ほとんど Pash-

6) Quetta は，Shal または Shalkot という Pashtun 族の寒村であった。Quetta という名は，Shalkot の kot からきているといわれる。

この寒村の戦略上の重要性に最初に着目したのは，“Forward Policy” の発案者であり，強力な推進者であった John Jacob であった。実際にここを軍事基地として拡充したのは，John Jacob の後継者であるが，しばしば Jacob の武闘派的体質とは対照的であったといわれる Robert Sandeman であった。

これは，恒久的占領の困難なアフガニスタンには間接的に影響力を及ぼすことにし，そのためにも Baluchistan の直接支配を完全にするという発想によるもので，すでに1850年代に Jacob の考えたところであった。Chaman 峠越しに Kandahar を臨むこの Quetta から，彼はロシアの南下をさえ迎撃しうると判断していたのである。

tun であり，家畜の多くも Pashtun 遊牧民のもたらしたものである。Quetta は Baluchistan 州の州都であるけれども，ちょうど Pashtun 族と Baluch 族の分布の境界線上に位置しているからである。仲買人の多くが，Baluch nomads は，病気やけがの家畜以外は，けっして換金したがらないことを証言する。

Baluch 自らも商業を軽視していることを認める。多くは，軽視するだけでなく，蔑視さえする。これは，彼らが都市への集住を嫌うこととともに，大きな特徴となっている。Baluch は Pashtun の商業志向や金銭への執着を軽蔑し，それをPashtun のユダヤ起源説という比較的新しい神話で説明しようとさえする。

このような Baluch 族の非商業的志向や集住への忌避が，Baluchistan におけるバザール都市の発達を妨げたということは十分に考えられる。しかし，逆に，バザール都市の未成立という社会的条件が，Baluch 族の上記のような性向を生み出したという解釈も不可能ではない。ここでは，両者の因果関係は措いて，Baluchistan ではアフガニスタンのようなバザール都市が成立しなかったこと，そして Baluch 族が商業活動と都市集住を好まないという二点を確認しておけば十分であろう。これらは，Baluch 族の nomadism が，Pashtun 遊牧民のそれのように，商業活動を基礎とするようなかたちになりえなかったことを傍証するものである。

従って，ここで，Pashtun 遊牧民と Baluch nomads（*pahwal* もしくは *baluch*）の nomadism の対照的性格が，その生活圏が商業活動を許すかどうかに大きく左右されていることを認めることができる。nomadism の社会経済的環境が大きく相違するわけである。

この視座に立つことによってはじめて，どうしてインダス河と古くからひらけたその氾濫原の近くに分布する Bugti や Marri といった Baluch の諸 tribes が，アフガニスタンの Pashtun 遊牧民に近い nomadism をおこなうのか，という問題も含めて，Baluch nomadism の地域変異を正しく理解することが可能になるであろう。Bugti や Marri の冬営地は，地理的にインダス河とその沃野に近接しており，これは畜産品の大きな市場を近くにもっていることを意味しているのである。

これに加えるに，いくつかの補足的な条件が加わるであろう。アフガニスタンでは，Abdur Rahman（Abd al-Rahman）王による，Pashtun 遊牧民の北への移住政策と，それに伴う Uzbek や Turkmen の牧畜活動の仰圧が政治的意図をもっておこなわれた。Hazara 族の征圧と，その居住地であるアフガニスタン中央高地 Hazarajat の開放は，Pashtun 遊牧民に新しい夏の牧地と市場を開くことになったのはいうまでもない。

とくに近代的な国家体制と税制の成立後は，いわば恣意的に引かれたパキスタンとアフガニスタンの国境は，その両側を一年一往復する Ghilzai 系 Pashtun 遊牧民に，絶好の商業活動の機会を与えることになった。両国間の特産物と税率のちがいは，周年の移動そのものを経済的に有意味なものにしたのである。

こうした政治過程に助けられて nomadism が伸展するという状況は，Baluchistan においてはほとんどみられない。"Forward Policy" の礎石として着々と英軍によって平定されて以来，独立後も，Baluch nomads は中央の政治権力からいつも抑圧されてきたようにみえる。19世紀における英軍の Baluchistan 支配によって，Baluch 固有の社会組織の解体がおこなわれたのではないかとかなりの蓋然性をもって考えることができる。この状況と，無秩序な略奪の頻発とが，少なくとも同時的に並存したことを確認することができるだけである。

少なくともアフガニスタンにおいて Pashtun 遊牧民が享受した，牧畜活動に対する特権をもたらした政治過程が，Baluchistan の社会的な脈絡でみられなかったことは確かである[7]。

19世紀において頻繁であったと報告されている略奪の応酬が，Baluch 族の族制や nomadism に果たした役割も十分に明らかにならない。それが，Bedouin のように大局的にみると適応的なものであったのかどうか［SWEET 1965］，また，その nomadism に変化を与えるほどの意味をもっていたかどうか，ほとんど不明のままである。ここでも，Pashtun 遊牧民との，若干の差を示唆することができるだけである［松井　1984］。

Baluch 族の nomadism を，自然条件に対する適応的な multi-resource nomadism ととらえるよりも，ここで試みたように，アフガニスタンの Pashtun 遊牧民との対比から，より広汎な政治過程と連関する社会経済的環境に対応した nomadic life の展開として把握する方が，イラン文化圏東縁地域での pastoralism と nomadism のあり方を歴史的な陰影のもとに位置づけることができる。ただ，ここで素描した遊牧または nomadism の歴史的な展開にかかわる諸契機は，19世紀以後に限定しても多岐にわたっ

7)　19世紀末から現代への遊牧生活と社会構造の変化については，Scholz の大部な著作がある［SCHOLZ 1974］。そこでは，Pashtun，Baluch，Brahui からそれぞれひとつずつの tribe が選ばれて，変化の実例分析がおこなわれている。やはり，Pashtun と Baluch，Brahui の間の社会構造上の差違が強調されている。ただ，これらの例がすべてパキスタンの Baluchistan 内から選ばれていることからもわかるように，筆者がここで強調している広い遊牧環境のもつ意味には力点が置かれていない。

ており，それらをひとつひとつ解析していくことは今後に残された筆者の大きな課題である。

参考文献

BALIKCI, A.

1978 Ethnographic Notes on Lakenkhel Pastoralism. Paper Presented at 10th I.C.A.E.S. in Delhi.

BALLAND, D.

1977 L'élevage du mouton karakul en Asie centrale soviétique. RGE 17 (1-2) : 73-87.

1979 L'astrakan en Afghanistan. *Centre Pedagogique Franco-Afghan, Bulletin* (*mai*): 20-28.

1982 Contraintes ecologiques et fluctuations historiques dans l'organisation territoriale des nomades d'Afghanistan. *Production Pastorale et Société* 11 : 55-67.

BARTH, F.

1964 Ethnic Processes on the Pathan-Baluch Boundary. In G. Redard (ed.), *Indo-Iranica.* Otto Harrassowitz.

GLATZER, B.

1977 *Nomaden von Gharjistān.* Franz Steiner Verlag.

松井　健

1980 『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活——北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系パシュトゥン族調査報告——』京都大学人文科学研究所調査報告33，京都大学人文科学研究所。

1984 「一九世紀アフガニスタン，バルーチスタンの遊牧民」『イスラム世界の人々　3　牧畜民』東洋経済新報社。

PASTNER, S. L.

1971 Ideological Aspects of Nomad-Sedentary Contact : A Case form Southern Baluchistan. *AQ* 44 (3) : 173-184.

1975 Co-operation in Crisis among Baluch Nomads. *Asian Affairs* 62:165-176.

PASTNER, S.L. and C.McC. PASTNER

1972 Agriculture, Kinship and Politics in Southern Baluchistan. *Man* 7 (1) : 128-136.

POTTINGER, H.

1816 *Travels in Beloochistan and Sinde.* A.Strahan.

SALZMAN, P.C.

1967 Political Organization among Nomadic Peoples. *Proceedings of the American Philosophical Society* 111 (2) : 115-131.

1971 a Movement and Resource Extraction among Pastoral Nomads : The Case of the Shah Nawazi Baluch. *AQ* 44 (3) : 185-197.

1971 b Adaptation and Political Organization in Iranian Baluchistan. *Ethnology* 10 (4) 433-444.

1973 Continuity and Change in Baluchi Tribal Leadership. *IJMES* 4 (4) : 428-439.

1974 Tribal Chiefs as Middlemen : The Politics of Encapsulation in the Middle East. *AQ* 47 (2) : 203-210.

1975 Islam and Authority in Tribal Iran : A Comparative Comment. *MW* 65 (3) : 186-195.

SCHOLZ, F.

1974 *Belutschistan* (*Pakistan*). Verlag Erich Goltze KG.

SWEET, L.E.

1965 Camel Raiding of North Arabian Bedouin : A Mechanism of Ecological Adaptation. *AmAnth* 67 (5) : 1132-1150.

TAPPER, N.

1973 The Advent of Pashtūn *māldār*s in Northwestern Afghanistan. *BOSAS* 36(1):55-79.

1977 Pashtun Nomad Women in Afghanistan. *Asian Affairs* N.S.8 (2) : 163-170.